

「負」を隠さず 具体的対策

— 30日から2日間、県立文学館で開かれる「山梨において自殺問題を考える集い」の呼びかけ人ですね

「勤務した病院で末期がんの患者ら数百人を看取り、僧侶として自殺で亡くなった人たちの葬儀をした経験などから、東京で3月に自殺と貧困をテーマにした集いを開いた。参加者の中から一緒に何かやりたいという人が集まって市民団体が生まれ、今度は自殺率が最も深刻な山梨で啓発活動をするのでネットワークをつくれなにかと思ったのがきっかけ。気が付けば半年、あつという間でした」

「山梨集い」で自殺問題訴える

— 県内の自殺対策の現状と課題をどのようにみられていますか

「行政側は何かしなければいけないと感じているが具体的なノウハウがなく、うまく機能していない部分がある。民間や個人は一つひとつの規模が小さく、資金力もない。これまで、場所と資金がある行政と人の力がある民間をつなぐパイプがなかった。もっとしたたかに、互いに利用し合っていくべきだ。秋田県は自殺率が高い地域として知られるが、大学や行政、民間の人たちが連携して取り組み、対策がじわじわと浸透

している。山梨でも、民間や個人が連携して取り組み、対策がじわじわと浸透している。



なかした・だいぎ 1975年、東京都出身。大学院で緩和ケアを学び、京都で真宗大谷派の住職資格をとった後、新潟県長岡市の仏教系ホスピスに3年余り勤務。31歳で退職

る」

— 山梨の自殺率全国ワースト1は、「発見地」をもとにした警察庁の統計。青木ヶ原樹海を抱え、県外者の自殺者が多いことがひとつの特徴です

「(県民と話して)ショックだったのは、県外の人ほとんどだから自分たちは関係ないと思ってしまう。むしろそれを隠そうとすること。行政も『ワースト1』という言葉が嫌がる。この状態こそが現状を象徴している。そういう認識を持っている限りは何も進まない。県外の人が多いのは事実。だからこそ山梨からモデルケースをつくれれば、全国に応用できるはず」

— 一方で、自殺問題を取り上げること自体が、逆に自殺を誘発するという指摘もあります

「確かに難しいさはあるけれども、自殺問題を取り上げること自体が、逆に自殺を誘発するという指摘もあります。確かに難しいさはあるけれども、自殺問題を取り上げること自体が、逆に自殺を誘発するという指摘もあります。」

ちんと踏まえた上で行動している。負の遺産を公開することで、何が必要なのか、具体的な対策を練ることができる。例えば、『ここに相談すれば助けてくれる人がいるんだ』という連絡先を示す。何をやるにしてもリスクはあるが、しっかりと説明して理解を求めたい」

— 山梨での活動を通じて感じたことは

「地域に根ざした活動の進め方や考え方を学ぶ必要性を感じた。東京は人との関係が希薄だけれど、色々な人がいてチャンスが多く、打てば響く人が多かった。山梨は保守的な地域。この半年で地方の現状をまざまざと見せつけられたし、自分のやり方に反省点もある。ただ、東京ではなく山梨だからこそできることがある。人と人がつながる」

「準備段階で少しづつ、仲間も増えてきた。半年前には見ず知らずだった人たちが早朝の甲府駅前と一緒に集いのチラシを配り、ちよつとうれしかった。『人間としてこの問題大事だね』と、一つの目的に少しづつ歩み寄りが出てきたと感じている。ただ、まだ畑を耕している段階です。芽が育つような環境づくりが必要。樹海についても、本来は観光地ですべきな場所。『なんでそこで死ぬのか』『なぜ人は生きているのか』と逆算して考えるような雰囲気になっていくこと」

「準備段階で少しづつ、仲間も増えてきた。半年前には見ず知らずだった人たちが早朝の甲府駅前と一緒に集いのチラシを配り、ちよつとうれしかった。『人間としてこの問題大事だね』と、一つの目的に少しづつ歩み寄りが出てきたと感じている。ただ、まだ畑を耕している段階です。芽が育つような環境づくりが必要。樹海についても、本来は観光地ですべきな場所。『なんでそこで死ぬのか』『なぜ人は生きているのか』と逆算して考えるような雰囲気になっていくこと」

し、東京で市民団体の活動を通じて自殺や貧困、孤独死の問題に取り組む。反貧困ネットワーク・自殺対策ワーキングチーム代表、僧侶、大学の非常勤講師などを務める。

は何ですか

「頭で考えるよりも、自殺しようとした人や遺族の体験など、当事者からの発言を実際に聞くことが一番大きい。自分だったらどうするか、ひとごとではなく誰にでもあり得ることとして感じてもらえれば十分。そんなに簡単には変わらないと思うけれど、大事な問題と考えてくれる人がひとりでも増えればいい。東京の集いでは、『身近な人に渡して』と相談先リストを2部ずつ配った。そんなちょっとした『自分のできること』から始めてほしい」

— 今回の集いにはある意味でスタート。この活動を今後どうつなげていきますか

「機が熟してくれば、必然的に組織や活動は続いていく。同じ目標に立って意識を高めて、少しずつ地元任せにしていきたい。この半年やってきたことが礎となって、今後の活動につながっていく。社会には色々な問題があるけれど、自殺や孤独死など人の死の在り方の問題はいまの社会を象徴している。根底にあるのは人の命。そこに対応できるのであればどんな分野でも応用が利くし、それぞれにとって役に立つことがあ

「準備段階で少しづつ、仲間も増えてきた。半年前には見ず知らずだった人たちが早朝の甲府駅前と一緒に集いのチラシを配り、ちよつとうれしかった。『人間としてこの問題大事だね』と、一つの目的に少しづつ歩み寄りが出てきたと感じている。ただ、まだ畑を耕している段階です。芽が育つような環境づくりが必要。樹海についても、本来は観光地ですべきな場所。『なんでそこで死ぬのか』『なぜ人は生きているのか』と逆算して考えるような雰囲気になっていくこと」

「準備段階で少しづつ、仲間も増えてきた。半年前には見ず知らずだった人たちが早朝の甲府駅前と一緒に集いのチラシを配り、ちよつとうれしかった。『人間としてこの問題大事だね』と、一つの目的に少しづつ歩み寄りが出てきたと感じている。ただ、まだ畑を耕している段階です。芽が育つような環境づくりが必要。樹海についても、本来は観光地ですべきな場所。『なんでそこで死ぬのか』『なぜ人は生きているのか』と逆算して考えるような雰囲気になっていくこと」

「できること」で前進

自殺問題について、どのように伝え、どんな対策が必要なのか……。取材をする中で、立ち止まり、悩むことがたびたびあった。山梨集いの直前、そんな葛藤を胸に抱きながら、改めて聞いてみた。

「いままでの間に死んでいく人が

いる」。これまで幾人もの死と向き合ってきたからこそ、中下さんの言葉には重みと危機感がある。

仕事の合間を縫って足しげく山梨に通い、ときに体当たりで様々な人たちを巻き込み、周囲を引っ張る原動力となった。

人集めや資金不足など、課題はたくさんあるけれど、自殺の悲劇は複合

的な理由が絡み合っているからこそ、今回のように枠を越えて多分野の人が集い、多角的な視点で問題を考えることで、一歩前に進めるのかもかもしれない。「自分にできること」の積み重ねが、本当の意味で「いのちを守るネットワーク」として、山梨から全国に広がっていくことを願っている。

(佐藤 隆彦)

取材を終えて